マチエ著『フランス大革命』に含まれる理論的混乱について

——(1)——

小　林　良　彰

Ⅰ　長所と短所
Ⅱ　王の代理人の階級的性格について
Ⅲ　封建地代の過少評価をめぐって
Ⅳ　すべての地方貴族が貧乏であったかどうか
Ⅴ　貢租と地代の区別を明確にするべきだ
Ⅵ　領地所有と土地所有の区別を明確にせよ
Ⅶ　宮廷貴族の権利が正確に描かれていない
Ⅷ　国王と宮廷貴族の関係が正確に描かれていない
Ⅸ　法服貴族の過大評価
Ⅹ　貴族とブルジョアジーの力関係が逆転させられている
Ⅺ　貴族革命論の誤り
Ⅻ　労働運動がフランス革命の前史になるか
ⅩⅢ　バスチーユ占領の原因が明確にされていない
ⅩⅣ　7月14日の敗者は誰か

Ⅰ　長所と短所

マチエの『フランス大革命』は，「知識階級を目標とした」というだけに，かなり膨大な事実を網羅したフランス革命史である。実に多くの人名，地名がでてくるので，これを記憶しながら読み続けることさえできるならば，日本で翻訳，出版されているフランス革命史の中でもっとも読み

ごたえのあるものといえる。

しかも，戦前に出版あるいは翻訳されたフランス革命史が，人物，思想中心で，歴史観が古いのにくらべて，マチエは政治的事件とともに社会経済的な分析も多く取りいれ，さまざまな事件の階級的性格にも考察をくわえているので，科学的なフランス革命史としては，まず第一に推せんされるべきものである。そういう意味からも，私は学生から，フランス革命の通史について尋ねられると，第一にマチエの『フランス大革命』をあげている。

そのような意義を現在でもまだ持ちつづけているだけに，この中に含まれている欠点についてもまた，昔から気になってきた。私も，かつてはマチエの書物からフランス革命史に入り，これを何度も読みかえしたのであるが，読めば読むほどなにか首尾一貫しないものを感じた。そうしたところの疑問をさらに追求していくことによって，フランス革命を専攻するにいたったわけであるが，さしあたりは実証的な研究を発表することが先で，その実証がマチエの書いたこととどのようにかかわりあいがあるのかについては，長い間懸案にしながらも，まだ総合的に発表する機会をもたなかった。

そこで，これからマチエの主張を順次とりあげて，それに対する批判をのべるという形式で筆をすすめたい。

II　王の代理人の階級的性格について

まずマチエは，フランス絶対主義と古い封建制度の本質的ちがいをつぎのようにのべている。

「ふるい封建制度は本質上，土地財産に基礎をおいていた。封建領主は土地所有者の権利や，行政官・司法官・軍司令官などの官職を一身に兼ねそなえていた。ところが，すでに長い前から，領主は自分の領地にある一切の公的機能を失ってお

り，それは王の代理人の手に移っていた」[1]。

このことは基本的に正しい。しかし「王の代理人の手に移っていた」という表現だけですませてしまうと，対立は領主と王との間にあるものと考えられ，階級としての領主が，ほとんど権力を失ったかのように思われる。

重要なことは，王の代理人の職が大貴族＝宮廷貴族，すなわち領主の一派によってにぎられていたことである[2]。それをいわずして，ただ代理人といってしまうと，階級としての領主がなにか他の勢力によって侵蝕され，排除されていったかのように受けとられる。マチエは，領主の力が絶対主義の時代に衰退していったという方向で描こうとする一貫したくせをもっていて，この文章がその出発点になっている。

Ⅲ 封建地代の過少評価をめぐって

つぎにマチエは，領主権の基本であった封建地代についてふれながら，これをかなり過少評価する方向で描いている。

「封建的地代，すなわち，または現物地代か，または金納地代で徴収された永代小作料の一種である封建的地代は，領主に1ヵ年約1億リーヴルしかもたらさなかった。この額は，たえず減っていく金の価値を考えれば，かなりの少額にすぎなかった。この地代は，数百年前に農奴制廃止の時にただ一回，一定の率にさだめられたもので，それに対して物価はたえずあがっていた。職務を失った領主は，今では自分の物として取っておいたり（本領地（レゼルヴ）をいう――訳者），また自分で直接にか，または代理人によって搾取した不動産から，大部分の富を引出していた」[3]。

「封建地代が領主に1ヵ年約1億リーヴルしかもたらさなかった」といういい方は，あまり正当なものではない。記録の不十分な当時にあって，封建地代の全国総計が，果して正確に算出されたであろうか。マチエがど

1 マチエ著『フランス大革命』ねずまさし，市原豊太共訳，岩波文庫3冊，昭和32年，34年，上巻20頁。
2 小林良彰『フランス革命の経済構造』千倉書房，昭和47年，3頁。
3 マチエ前掲書 上，20～21頁。

のような根拠をもって計算したか。いまだに不明である。

それにしても，この数字が正しいものと仮定しよう。当時の国家予算総額が，ネッケルの報告によると約2億5,000万リーヴルである。つまり1億リーヴルとは，国家予算の半数弱ということになる。それは巨大な額だというべきだろう。それを特定の階級が手に入れたのに，「約1億リーヴルしかもたらさなかった」という表現が適当であろうか。

つぎに，この額が固定されているのに，他方で物価が上り，金の価値が減っていくという書き方で，領主の実質収入が減少していったという。しかしこれにも問題がある。まず，物価はたえずあがっていたというが，革命前までの物価上昇率は，それほどひどいものではない。[4] 革命以後のインフレーションはすざましいものであった。しかし，これは一種の紙幣インフレのためであり，革命前にはこうしたものがなかったから，今日のインフレの感覚からするならば，革命前の物価上昇はそれほど大きなものではなかった。当時は，金貨，銀貨，銅貨が流通していて，とくに銀貨が中心であった。こうした貴金属の価値は国際的に一定である。そうしたときに，物価が目立って上昇をつづけるということはありえない。マチエは，現代の管理通貨制の感覚をもって当時を語っている。

つぎに，この地代が一定の比率の貨幣に定められているかのように書いているが，フランスの封建地代は，一律に金納と定められていたわけではなかった。物納のところもあり，金納のところもあった。このことは，マチエも知っている。物納であれば，物価が上昇しても問題はない。ところが，マチエは，理論化するときは中世イギリスに目立っていた金納地代

---

4 たとえば，リル市で小麦の価格は1725年から1789年までに，約2倍に上っている。G. Lefebvre, *Les paysans du Nord pendant la Révolution française*, Bari, 1959, p.268. 約60年に約2倍の上昇は，それほどたいしたものではない。しかもこれは小麦の一地域における変動である。総合的な物価については，当時の資料だけでは計量不可能であろう。

が，フランスでも画一的におこなわれたかのように書いてしまう。

つぎに，封建地代が少いという評価を補うものとして，本領地から大部分の富を引出していたという表現をする。本領地とは，直領地あるいは直営地のことをいう。直領地と領地の区別については，私も詳しく論じたことがある。[5] 直領地と領地の関係もまたさまざまであって，ある領地では直領地がほとんどなく，他の領地では直領地の面積が領地の大部分をしめていた。その中間に，さまざまな比率があって，これを統計的に何パーセントの比率ということはいえない。直領地のほとんどない領地のばあい，領主は直領地から富を引出すことはできなかった。したがって，この問題をめぐって，マチエのような理論づけはとうていできる性質のものではない。

Ⅳ すべての地方貴族が貧乏であったかどうか

マチエは，貴族が没落に向っていたことを強調したいという一定の傾向をもっていて，地方貴族の状態を描くときに，彼らが例外なしに貧乏であったと思わせるような書き方をしている。

「ブルターニュ，ポワツー，ブーロネなどのような若干の州では，非常に多くの本当の貴族的平民（田舎貴族）があらわれた。彼らは自分のささやかな館で陰気な顔をして坐食し，宮廷の官職をおびている大貴族をきらい，商工業で富をえた都会のブルジョア階級を軽蔑しながらも，実はうらやんでいた。また彼らは汲々として，取っておきの徴税不入権を王の代理人の侵害からまもった。また貧しくなり，無力になればなるほど，ますます傲慢になっていった[6]」。

しかし，貧乏な田舎貴族が，このように特定の州に多かったという書き方をするのも問題である。貧乏な田舎貴族は，フランス全国にいた。とくにこれらの州にかぎったことではなかった。また，これらの州にも大貴族

5 拙著『フランス革命の経済構造』147～152頁，『フランス革命経済史研究』ミネルヴァ書房昭和42年，175～178頁，『フランス革命史入門』三一書房 昭和53年，70～74頁。

6 マチエ前掲書 上，21頁。

がいたわけであり，要するに，大貴族，中貴族，小貴族がそれぞれ分散しているという意味では，どの州でもかわりがなかった。

彼らが大貴族を嫌い，ブルジョアを軽蔑していたということはたしかであるが，宮廷の大貴族と貧乏な田舎貴族を対比させて，これをあまりに強調しすぎることも正しくない。なぜなら，地方貴族の中にも，相当に豊かな貴族も多かった。たとえ宮廷に出入りできなかったとしても，である。そうした者もまた，ピラミッド型に分散していたのであり，その実例は，かつて私も紹介したことがある。[7] つまり，田舎貴族のすべてがすべて貧乏であったというわけではない。豊かな地方貴族もおれば，貧民に似た貴族もいたのである。

「徴税不入権を王の代理人の侵害から守った」という言葉も誤解を招く。この徴税という言葉をどのように解釈するか，国王の課す税金と解釈するならば，マチエの言い方に従うと，この時代の領地には不輸不入権が残っていたということになる。しかし実際には，それが崩れる過程でフランス絶対主義が成立した。

この時代の農民は，国王に租税を支払い，領主に貢租を支払っていた。昔は，両者に相当するものを領主が取った。徴税不入権が王権によって侵害されたために，地方貴族はそれだけ貧乏になったのである。だから，徴税不入権を王の侵害から守ったならば，地方貴族はもっと豊かであったはずだ。ここのところでマチエの叙述はまったく矛盾している。

地方貴族のすべてが貧乏であるという書き方をしながら，彼らが貧乏になった原因そのものは，むしろ否定するような書き方である。そうではなくて，地方貴族が「汲々として守った」ものは，彼らの年貢徴収の権利であったといわなければならない。

事実，マチエはそのつぎの文章で，田舎貴族が貢租の徴収を厳格にした

---

7 拙著『フランス革命の経済構造』38頁，『フランス革命史入門』38頁。

ために，農民から恨まれたと書いている。これの方が正しい。その前の，徴税不入権を王から守ったという言葉はまちがいである。むしろ，多少でも徴税不入権を守ったものは，宮廷貴族であったようだ。彼らは，徴税担当の知事に対する影響力を行使して，自分の領地内部における税金の徴収に手心を加えさせることができた。

V 貢租と地代の区別を明確にするべきだ

「絶対王政が，リシュリューやルイ14世の治世とともにすっかり根をはって以来，一切の政治的，行政的権力をうばわれた田舎貴族は，しばしば自分の農民から憎まれた。というのは地代の徴収にあたっては，生活のためにやむをえないとはいえ，理不尽な要求をしたからである」[8]。

このマチエの言葉にもまた正確でないところがある。今度は，「地代の徴収」という言葉を使っている。地代といえば，地主・小作関係の中において地主が徴収する地代と解釈できる。もちろん，封建地代という名前で封建貢租のことを地代というばあいもある。けれども，それはその他に地代がないばあいに使ってもよいので，もしそのほかに地代というものがあれば，地代は地代，貢租は貢租と厳密に区別しなければ，理論的な解釈のときに混乱をまねく。事実，あとからふれるように，マチエは混乱をおこしているのである。

というのは，当時領主がいて，領主が封建貢租をあらゆる土地所有者から徴収していたが，その土地所有者の中に，大中小さまざまあった。大規模な土地所有者は，またその下の小作農民に土地を貸して，地代を徴収していた。そこで，大規模な土地所有者が農民から地代を徴収しながら，自分の上の領主にたいしては貢租を支払っているというような関係が，広く展開していた[9]。

8 マチエ前掲書 上，22頁。
9 拙著『フランス革命経済史研究』278頁，『フランス革命史入門』73頁。

そこで，マチエは，前の文章では地代といわずに貢租の徴収であると厳密に規定すべきであった。田舎貴族が地代の徴収をしていたという表現をすると，読者は，田舎貴族が土地をもっていて，それを農民に貸し与え，地代を徴収していたのであろうと単純に受けとる。そこで，田舎貴族＝地主という誤解がでてくる。

この誤解がなぜいけないのかというと，もしこうした誤解のうえで，やがておきる封建貢租の無償廃止を考えるならば，フランス革命において，地主制が一挙に消滅するのが当然だとの結論をまねく。事実，フランス革命の結論として，世界各国で，多くの人がそのような理論的結論を引出した。私も長い間，この種の誤解に迷わされてきたが，貢租と地代の区別に気がついたとき，その迷いから抜けだすことができた。

したがって，誤解をさけるためにもう一度いうと，マチエのこの文章は「地代の徴収」を訂正して，「封建貢租の徴収」というべきであった。

Ⅵ　領地所有と土地所有の区別を明確にせよ

マチエの書いた文章ではないが，翻訳者の加えた注の中に，貴族と僧侶がそれぞれ全国の土地の５分の１づつを領有したという説明がある。

「あらゆる種類の貴族をふくめた総数は14万人，全国の土地の５分の１を領有した」。

「僧侶司祭の総数は13万人，その領有地は全国の５分の１，財産は40億フラン，年収は２億4,000万フランに達した」[10]。

この書き方もまた正確ではない。土地の５分の１を領有したと貴族のばあいは書き，僧侶，司祭のばあいは，領有地が全国の５分の１であったと書く。土地というと，領地の意味ではなくなるが，領有というと，土地所有の意味ではなくなり，土地を領有ということ自体が，矛盾の産物である。

10　マチエ前掲書　上　23～24頁。

この時代，厳密にいうと，全国はすべて領地にわかれており，その領地の下に土地所有（厳密にいえば保有）があった。そして，フランス革命史の研究家が，土地所有の大小を研究するときには，ほとんどのばあい，領地の下にある下級土地所有権としての土地所有の分布について研究したのである。

その比率は，これも全国的な統計数字を出した人がいないので，はっきりとした数字で表現することはできない。ある研究では一つの州について行われ，別な研究では，一村落について行われている。[11] こうした数字を平均しても，数学的な意味はないが，ほかに適当な数字がないので，一応の目安として，僧侶5分の1，貴族5分の1とされている。その他が，ブルジョアと農民の所有地ということになっている。これは，一応の目安として受けとめた方がよい。

ところで，これを領地と解釈するならば，当時僧侶や貴族階級が，第一身分，第二身分として特権階級であったといわれるのに，その領地が5分の1づつというのであれば，とりたてて特権的だとはいえないはずである。5分の3の領地をブルジョアや農民がもっていたのかと聞かれると困るだろう。ここにまず，この注のおかしいところがある。

「土地を領有する」とか，「領有地をもつ」という表現をして，実際は土地所有か領地所有か分らないように，あいまいにぼかしているところに，この本の欠陥がある。おそらく，注をつけた人も，この点に自信がなかったのだろう。

なぜなら，領地所有の実態について研究した成果が，日本にはなにひとつ紹介されていなかったからである。不思議なことに，フランスでも，この研究がほとんどなされていない。これを日本の徳川時代にたとえていうならば，大名の領地所有の実態についてほとんど報告がなされず，その下

11 拙著『フランス革命経済史研究』176頁。

の土地所有，すなわち自作農や地主（庄屋，名主層）の土地所有の分布についてだけ，5分の1とか2分の1とかの数字が出されていたと思えばよい。そこで，領地のあることはわかっているが，数字がわからないために，土地所有の数字をあてはめて5分の1の土地を領有するといういい方になったのである。

私が，三部会への請願書の資料集をもとに，領地所有の実態を数量的に調べてみたところ，貴族と僧侶と国王でほとんどの領地をもち，それ以外，すなわち平民の領地というものは，10パーセント程度にも満たないことをつきとめた。[12] そこで正確を期するために，「土地を領有」などという言葉を使うと領地と土地を混同することになるので，これをわけるところからはじめるべきである。

まず，貴族と僧侶と国王がほとんどの領地を領有していたというべきであり，その下の下級土地所有権としての土地所有については，貴族，僧侶それぞれが約5分の1づつであったというべきである。これが正しい認識といえる。

Ⅶ 宮廷貴族の権利が正確に描かれていない

大貴族あるいは宮廷貴族を，この本では堂上貴族と翻訳して，その実例について書いている。この実例に間違いがあるわけではない。ただ，書き方について，やや誤解を与える点があるので，それを指摘してみよう。

まず，「彼らはみずから大きな本領地を領有している」[13] という表現がある。これは，大領地には大きな本領地がついていたのが普通であったから，そのかぎりでは正しい。ただ，いままでのように，領地のことは書かずに土地所有とだけ書いておきながら，突然本領地を領有していると書く

12 拙著『フランス革命の経済構造』73～100頁。
13 マチエ前掲書 上，24頁。

と，読者の頭をますます混乱させることになる。

いったい，土地と本領地とはどうちがうのかということである。また，本領地の領有が，それだけ取りあげられて強調されると，これも誤解の種になる。正確にいうと，彼らは大領地を所有していたので，その大領地の一部に，大規模な本領地があったというべきである。本領地から莫大な収入をあげたという意味で，「十分な富を自由にしたように思われる」と書いているが，本領地だけから莫大な収入をあげたというべきではない。大領地全体からあがる収入が巨大であったということを読者に忘れさせてはいけない。つまり，本領地からの収入と，本領地以外の領地からあがる封建貢租，その他の収入が加わったものであることを，強調しなければならない。

つぎに，同じページに，「大貴族は平気で借金をし，そして破産した」という書き方で，破産，借金の実例が三つ四つ書かれている。この書き方は誤解をまねく，破産をしたから，国王が尻ぬぐいをしたと書く。そのかぎりにおいては正しい。だが，破産という意味が，現在と当時とはちがっていたことについて，もう少し書かなければならない。なにか大貴族が弱者の立場に立ち，今日の言葉でいえば，貴族が倒産会社の立場にあったかのように受けとられるからだ。そうではなくて，この時代，破産の権利といわれるものがあって，収入を超える支出をまえもっておこない，破産をしたといって国王に頼みこめば，国王が国家財政の資金からその穴埋めをした。こうした権利が宮廷貴族にあった。[14]

これを平たくいえば，国家資金の前使いの権利である。それを見越して勝手に破産するのであるから，破産は一つの特権であった。それでいながら，決して現在のように差押えもされなければ，没落もしない。破産をすればするほど，巨額の国家資金を使いこんだということになるので，国家

14 拙著『フランス革命経済史研究』234頁。

財政からの略奪の手段となった。その意味では，破産した宮廷貴族は弱者ではなくて，社会の最強の者であったというように描かなければならない。

もう一つ，破産の実例の中に，「ロアン・ゲムネ親王」という表現がある。ここで親王と書くと，日本の感覚では，国王の家族と理解される。原語は Prince であるが，皇太子という意味ではなくて，公爵の上にある最高級の貴族を意味するもので，むしろ「太公」と翻訳するのが妥当だろう。国王の一族と区別するためである。むしろ，国王の一族という意味では，25ページにでてくる王の二人の弟プロヴァンス伯爵，アルトワ伯爵がもっとも近いところである。同じところに「ジャンリス内親王」という翻訳がある。このような表現では，彼女が国王の家族のように受けとられるが，正式にはジャンリ伯爵夫人といわれて，国王の家族ではない。

Ⅷ 国王と宮廷貴族の関係が正確に描かれていない

宮廷貴族と国王との関係についても，マチエは奇妙な描き方をする。宮廷貴族が国王に服従しなかったとか，宮廷貴族と王権が対立していたのではないかと思わせるような文章が出てくる。これは，フランス革命の出発点を貴族革命と考えるフランス歴史学界の一般的傾向をふまえているからである。

これでは，国王が宙に浮いてしまう。また，宮廷貴族のほとんどが，国王となんらかの意味で対立していたとか，あるいは，国王を真剣に守ろうとはしなかったというようないい方になっている。つぎの文章は，そのような意味を含めて書かれている。

「妙なことだが，一切のことを王にたよっていた彼ら宮廷貴族は，王に服従するどころではなかった。多くの者は豪奢な有閑生活に退屈していた。もっとも優秀で野心のある者はもっと活気のある生活を夢みている。彼らはイギリスの貴族のように，国家機構の中で端役とは違った役割を演じたいとのぞんでいた。彼らは，自分

の希望にあてはめて，新思想に共鳴していた。幾人かは，それも錚々たる貴族，たとえばラファイエット家，キュスチーヌ家，ヴィオメニール家の兄弟，ラメット家の四人兄弟，ディロン家の三人兄弟たちは，アメリカの解放戦争に武器をとって参加したのであるが，フランスに帰ってからは，現存秩序の反対者の役割についた。他の貴族は分派にわかれ，王妃の寵臣に反対して王族のまわりにあつまって陰謀をくわだてた。こんな有様であるから，危険な時がせまっても，大貴族は王位をまもるために，どうしてなかなか，一致するはずがないのである[15]」。

この文章は，宮廷貴族の主流と反主流のうち，主流については実例をなにもだしていない。反主流のことをくわしく書いて，反主流があたかも主流であるかのように描いている。そのことによって，宮廷貴族の大勢が，国王に対立するものであったかのように思わせようとしている。

しかし，ここに書かれているラファイエット以下の貴族は，自由主義貴族と呼ばれるものであって，ブルジョアジーと結んで宮廷貴族の中の革新派を構成していた派閥である。なぜ革新派を構成したかといえば，彼らが，宮廷の中で十分な待遇を手に入れることができなかったからである。それはマチエもいくぶん認めている。

「国家機構のなかで端役とは違った役割を演じたいとのぞんでいた」と，これら自由主義貴族の心情を解説している。

たしかに，彼らは端役しかもっていなかった。しかし，彼らが端役しかもっていないということは，誰かが重要な役職をにぎっていたのである。その重要な役職をにぎっていた者が，宮廷貴族の主流であった。たとえば，コンデ太公，ブローイ元帥（公爵），ポリニヤック公爵夫人など，こうした多くの実例もまた，紹介することができる[16]。

そして，これらの宮廷貴族が保守派を構成していて，三部会の召集に反対し，最後は，国民議会の武力弾圧を企だてた。そうした努力にもかかわらず敗北したのである。そのかぎり，彼らは王位を守るために全力をあ

15 マチエ前掲書 上，26頁。
16 拙著『フランス革命の経済構造』1～5頁，『フランス革命史入門』22～30頁。

げ，そのあげくに敗北した。

したがって，大貴族が王位を守るためになかなか一致しなかったといういい方は，分派の対立を，各個人の対立に置きかえたやり方である。たしかに，宮廷貴族の保守派と革新派を一つにしてみると，意見は一致しなかったかもしれない。しかし，保守派は保守派で一本にまとまっていた。もちろん，その中での指導権の争奪戦があったという意味では，あらゆる時代，あらゆる階級につきものであり，とりたてて言うほどのこともない。

しかし，それとこれは別だ。マチエのいい方によれば，フランス革命が切迫したときに，まるで，大貴族が国王をおいてきぼりにしたかのような印象をうける。そうではなくて，やはり，国王は宮廷貴族の保守派の代表者という形で，フランス革命を迎えたのである。

Ⅸ　法服貴族の過大評価

法服貴族（司法官貴族）についても，誤解をまねくような叙述がある。法服貴族は司法権だけを国王からまかされていた。しかもその地位は，官職売買の制度によって，金で買い取らなければならなかった。宮廷貴族と法服貴族のどちらが有力であったかというと，これは宮廷貴族に決っている。宮廷貴族は行政，軍事の権力をにぎり，法律を王の名前でつくることができた。

ところが，マチエの書き方では，法服貴族が行政権もにぎっていたかのような感じをうける。また，彼らが宮廷貴族のうえにいたばあいもあるのではないかと思わせるような言葉がでてくる。

「貴族階級のなかには，実際にはたがいに敵対する階層がふくまれており，もっとも古い称号を主張できる貴族がもっとも有力者だというわけではない。血統の正しい貴族とか武家貴族とならんで，この二百年間に，行政上司法上の官職を独占する司法官貴族とか官僚貴族ができあがった。古い貴族と同様にごうまんで，おそらくそれ以上ゆたかな，この新しい身分の先頭には，控訴をあつかう最高法院判事が

たっている。非常な高値で買って，父から子へとつたわった官職を手に入れた判事は，実際には罷免されないのである」[17]。

「行政上司法上の官職を独占する司法官貴族」といういい方は正しくない。行政権は宮廷貴族の手ににぎられていた。たとえ法服貴族が行政権に似た権力をもっていたとしても，それは末端のものか，司法行政のていどであった。

マチエは行政上，司法上の官職といいながら，こうした貴族の先頭に「最高法院判事（高等法院判事）が立っている」と書く。法服貴族のトップはせいぜいのところ高等法院判事である。大臣とか将軍のような行政，軍事の地位には，司法官貴族は登用されないのである。マチエの文章を注意深く読むだけでも，そのようなくいちがいを認めることができる。

また「司法官貴族とか官僚貴族」といういい方も誤解をまねく。官僚という意味を，一群の司法官僚と解釈すれば問題がないのであるが，現代の人間が官僚という言葉を聞くと，それは大蔵，通産，農林などの行政職の高級官僚を思いうかべる。そうすると，なにか法服貴族が，このような高級官僚になっていたのではないかと思いこんでしまう。いつの間にか，法服貴族が行政権までにぎっていたのではないかと思うようになる。法服貴族が権力の中枢にいて，宮廷貴族がそれから排除されていたかのような印象をもってしまう。

そこで，その前の文章，つまり「もっとも古い称号を主張できる貴族がもっとも有力者だというわけではない」という文章と組合せてながめるならば，宮廷貴族はもっとも古い家柄であり，司法官貴族はブルジョアあがりの成り上り者の貴族であるから，宮廷貴族よりも法服貴族が上位にあったかのように受けとられてしまう。しかしこれは間違いである。まず，法服貴族はその官職を金で買わなければならない。宮廷貴族は，たとえ大臣

17 マチエ前掲書 上 27頁。

や将軍の地位であっても金で買う必要はなく，当然の権利として任命され，高い俸給を手に入れた。しかも，大臣，将軍の官職収入と，高等法院判事の官職収入を比較すると，後者がひと桁すくない。それだけでも，どちらがより特権的であるか明らかだ。

そのことをマチエもうすうすは感じている。そこで「もっとも有力者だというわけではない」という慎重ないいまわし方で逃げている。つまり，法服貴族の方が有力であったかのように書きながら，そうではないという証拠をつきつけられたばあいには，「だというわけではない」という表現にしておけば逃げられる。

それでいながら，文章の全体の脈絡では，法服貴族が上であるかのように書く。また，「おそらくそれ以上豊かな」という言葉を使って，法服貴族が宮廷貴族よりも豊かであったかのようにいっている。しかしそんなことはない。たしかに，法服貴族の頂点には巨大な財産家がいた。しかし，宮廷貴族の頂点にいる者は，それ以上の財産家であった。たとえば，コンデ太公の財産をしのぐような法服貴族はいない。もちろん，宮廷貴族の下と，法服貴族の上をくらべるならば，法服貴族がより豊かである場合もあった。しかし，そんなことは，ここでの比較の対象にはなりえない。

なぜマチエが，このような小細工とみられるようないい方をしたのだろうか。それは，マチエ，ルフェーブル以来，フランス歴史学会の伝統になった貴族革命説の伏線を置きたいという潜在意識があったからだ。つまり，最強にして最高の貴族の集団が国王を取りまいていて，これが最後まで国王の側に立ったとするならば，フランス革命が貴族革命からはじまったという理論に無理がでてくる。そこで，そのような貴族はいなかったといい，あらゆる貴族が国王にたいしてあれこれと反対していたといういい方をしなければ，貴族革命説にはならない。そこで最高の宮廷貴族の一団も，法服貴族の水準，あるいはそれ以下に落しておかなければならない。

そのような先入観があったために，宮廷貴族を法服貴族の下に置くようなことをいったのだろう。

ただし，具体的な文章の中では必ずしもその理論で通してはいない。たとえば，マチエは高等法院が，「最高官吏にたいしてさえ——たとえばブルターニュの司令官エーギョン公」[18]に対して大胆に批判したと書いている。そして注には，彼が「ルイ15世時代の宰相，ブルータニュ州の領主，最大の大土地所有者の一人」であったと紹介してある。[19]この文章だけをみても，エーギョン公爵が最大級の財産家であり，しかも最高の権力，とくに行政権と軍事の権力をにぎっていたことがわかる。しかも，彼を高等法院が批判するときには，「大胆に」というわけであるから，本来いえば，恐れ多くて批判できない立場にあったことがわかる。それにもかかわらず，高等法院が必死の力で批判したのである。

そこにおける力関係としては，エーギョン公爵が権力の側にあり，高等法院は野党的な立場にあったということが自然に理解できる。この事実関係に間違いがあるわけではない。むしろ，そのような事実関係を，マチエは理論的な整理の段階で逆転させている。そこに，偏見というべきものがみえる。

X 貴族とブルジョアジーの力関係が逆転させられている

ブルジョアジーと貴族の関係についてもまた，同じようなことを書く。ブルジョアジーが上昇していくのにつれて，貴族階級が没落していったかのようないいまわし方である。

「ブルジョワ階級はたしかにフランスの富の大部分を所有していた。彼らはたえず進歩していくのに，特権階級はこれに反して没落して行った。彼らの生長は，依然として自分らに強いられている法律上の劣等的地位をますます激しく感じさせ

18 マチエ前掲書 上 28頁。
19 同前29頁。

た」[20]

この文章の中で，ブルジョワ階級がフランスの富の大部分を所有していたと書いているが，このようなことを統計的に証明する手段があるはずがない。それに最大級のブルジョアの財産といえども，最高の宮廷貴族の財産をこえたわけではない。たとえば最大級の銀行家ネッケルの財産が700～800万リーヴルであったが，最高の宮廷貴族コンデ家の財産は，2500万リーヴル前後であった。[21]

また，権力をにぎっている宮廷貴族が経済的に没落するままにじっとしているはずがない。どんな時代であっても，権力は権力である。権力の坐にいる者が静かに没落していくというようなことはありえない。それであるがゆえに，権力の争奪戦がおこり，革命がおこる。

経済的に，自然にブルジョアジーが上昇していって，貴族階級が，自然に没落していくのであれば，フランス革命は必要でない。マチエの説明では，ブルジョアジーが経済的に優位に立ったのに，法律的地位が劣等であったため，自分にふさわしい地位を手に入れようとして革命を行ったことになる。このような解釈もまた，フランス歴史学会の一般的な傾向である。

これは，長い経済的進化の傾向と，革命という一時点の権力争奪戦を混同しているのである。そうではなくて，フランス革命のときまで，特権階級，とくに宮廷貴族は没落せず，ブルジョアジー以上の富をもち，権力をにぎっていたのである。それであるがゆえに，ブルジョアジーが必死の力で，あらゆる階層を巻きこんで革命に立ち上ったのである。

XI　貴族革命論の誤り

第2章は貴族の反乱という題名になっている。この表現が，貴族革命説

20　同前37頁。
21　拙著『フランス革命の経済構造』20～24頁，202頁。

にもとづいたものであることは明らかだが，ここでとりあげられている貴族は，すべて宮廷貴族の主流ではない。

たとえば，オルレアン公爵が王権に抵抗したことが取りあげられている[22]が，彼はラファイエット侯爵と同じく，自由主義貴族の側に立っていた。高等法院（最高法院）の反抗も詳しく描かれている[23]が，先にのべたように，法服貴族もまた野党的な立場であった。

ところが，たとえば王権を代表して高等法院を弾圧したブリエーヌ（ブリエンヌ伯爵，大司教，財政審議会議長，実質的な宰相）については，なに者であるかを説明していない。実はブリエンヌは伯爵，大司教，大領主であった。この本では，せいぜいのところ，高級僧侶であるというイメージしか与えられないが，彼が一流の宮廷貴族であったということを無視するべきではない。

また，彼が最高法院を追放し，それにかわるものとして全権裁判所を設置したというが，これの構成メンバーとして，「高級官吏からなる」という表現ですましている[24]。最高法院を越える高級官吏とはなに者であるか，という説明がなされていない。そうすると読者は，現代の世の中の高級官吏を思いうかべてしまう。ここにもまた落し穴がある。

この高級官吏とは，宮廷貴族の上層，つまり最高級の貴族であった。この事実をなぜ避けるのかといえば，そうしなければ，貴族の反乱というテーマが成立しないからである。

ブリエンヌも，あるいはまたマチエのいう「高級官吏」も貴族であったということになると，貴族にたいして貴族が反乱を起こした程度のものになってしまう。事実，その程度のものであったのだが，そうすると，「貴族の反乱」とか「貴族革命」をフランス革命の第一段階におこうとするマ

22 マチエ前掲書 上 60頁。
23 同前59頁。
24 同前61頁。

チエの意図が崩れてしまう。そこで，意識的にか無意識的にかは知らないが，自分に都合の悪いところをカットしているのである。

XII 労働運動がフランス革命の前史になるか

レヴィヨン事件の解釈についてもまた，別の角度からの偏見がみられる。この事件について，まずマチエの文章と翻訳者の注によって説明をうけたい。

「パリでは4月27日に，レヴェイヨンの大壁紙工場が血みどろの一揆のために掠奪された」

「レヴェイヨン事件——この工場は貧民のすむサンタントワーヌ街にあった。労働者は1日15スー（1スウは5サンチーム，1フランは100サンチームで約1円，したがって15スウは約75銭）の低賃金では暮せないと，工場主レヴェイヨンに賃金引上げを嘆願した。この時レヴェイヨンが叫んだ，「労働者は黒パンとソラマメをくっていればいい，麦などはくうものではない。日やとい職工は15スーあれば，立派に暮せる」と。ここにおいて労働者はたちあがった。レヴェイヨンはバスチーユ城に難をさけた。男爵ブザンヴァル大尉は兵をひきいて，労働者をおいはらった。翌日になると，ますます多くの群集があつまり，見物人が全市からあらわれた。大尉はさらに兵力をましたが労働者も数をまし，倉庫をやきはらい，軍隊に対抗した。彼らは「貴族を倒せ」とさけんんだ。大尉がスイスやとい兵に命じて大砲を発砲しようとしたため，労働者は退散したが，死体は500をかぞえた。パリ全市の富豪は大尉に感謝した。労働者はオルレアン公が金をやって，けしかけたものとも伝えられている」(訳者の注)。

「この運動はただに食物買占人や古い課税制度，入市税，封建制度にたいしてむけられたばかりでなく，人民を搾取し，その膏血をしぼって暮しているすべてのひとびとにむかっても，くわえられたのである」[25]。

この事実の経過に問題があるのではないが，その中にある解釈について問題がある。まず，マチエによると，この運動が，貴族もブルジョアジーも含めた有産階級にたいしてむけられたという解釈になる。そうすると，あたかもプロレタリア革命の前史に相当するような運動が，ここにおこっ

25 同前，78～79頁。

たといわんばかりの印象をうける。

そのうえ，注の説明によると，パリの工場主にたいする労働者の反乱が，軍隊に対抗しながら，「貴族を倒せ」と叫んだというのであるが，これもますます奇妙である。工場主に反抗した運動ならば，「ブルジョアを倒せ」ということになるはずだ。なにか説明が首尾一貫していない。

そのうえ，これを鎮圧した責任者を「男爵ブザンヴァル大尉」と書いている。そのうえで，鎮圧に成功すると，「パリ全市の富豪は大尉に感謝した」という。そうすると，ブザンヴァル男爵は，パリのブルジョアの守護神であるかのように思われ，これでは貴族とブルジョアジーが一体になって，労働者の運動に対立したかのような印象を与えられる。

しかも，その労働者は工場主レヴィヨンのもとで働いていて，賃上げを嘆願したところ拒否されたという説明である。これならば，現代流の労働運動がそのまま反乱につながったと解釈できる。貴族とブルジョアジーの同盟にたいする，労働者の反乱というパターンで説明がつけられる。

しかし，この事件の研究については，かなり実証的な結論がついている。つまり，この暴動に参加した者の大多数は，レヴィヨンの工場に雇われていた労働者ではなくて，騒乱を起したのは外部から来た貧民がほとんどであった。そのため，工場主対労働者という公式では説明ができない。

つぎに，運動が発生してから鎮圧されるまでにある程度の時間があり，王権の側は，はじめこの運動を，多少「いい気味だ」というくらいにながめていたらしいといわれている。なぜなら，レヴィヨンが，三部会の選挙運動の中で，第三身分代表の有力候補者であったからだ。すなわち，レヴィヨンもまた，ブルジョアジーの一員として王権に抵抗しようとしていたので，その工場が襲撃の対象になるならば，貴族階級にとって，貧民の運動は敵の敵であり，ある意味では味方のように思われたからである。

しかし，それがあまりに秩序を乱しすぎると，王権としてもこれを抑圧

しなければならない。そこでブザンヴァル男爵が派遣された。彼は役目上鎮圧したのであるが，パリ全市の富豪，パリのブルジョアジーが素直に感謝して，ブザンヴァル男爵を彼らの味方だと考えたわけではない。

ブザンヴァル男爵はマチエが後で書いているように，7月14日の時点で今度は軍隊を率いてパリに入り，国民議会とパリ市民を弾圧するための司令官となった。[26] そののち，王権回復のための反革命陰謀をめぐらして捕えられ，処刑された。フランス革命史におけるブザンヴァル男爵の役割とは，もっとも戦闘的な宮廷貴族であり，しかも軍事的才能をもった反革命の闘士ともいうべき人物であった。

彼の軍事力は，フランス革命の時点で，パリのブルジョアジーにたいして向けられた。そこにおいては，ブルジョアジー対宮廷貴族の対立がみられる。したがって，パリ市の富豪が感謝したという言葉を，固定的にとらえることはまちがいになる。レヴィヨン事件の時点で，騒乱を鎮圧したというかぎり感謝されたといえるが，その後はまた，両者が分裂をする。

そして，フランス革命では，レヴィヨン事件のような運動が発展して，バスチーユ襲撃へとつながったのではない。レヴィヨンのようなブルジョアジーの集団が，ブザンヴァル男爵に代表される宮廷貴族の軍事力にたいして，一時的に下層民をまきこんで対立し，時の最高支配者を打ち破ったものである。[27]

この注の終りに，「オルレアン公が金をやってけしかけたものとも伝えられている」と書いてある。このようないい伝えがあることは事実だから，これを書くことは決して悪いことではない。しかし，当時の最大級の大領主オルレアン公爵がそそのかした運動だということになると，ますます，この運動が純粋の労働運動ではないということになる。そうすると，

---

26 同前，101.
27 拙著『フランス革命の経済構造』226～235頁。

この注の理論的説明やマチエの要約は，ますます筋の通らないものになる。つまりは，支離滅裂の説明といわれても仕方がない。

なぜこのような説明の仕方になったかというと，マチエがマルクス主義的な解釈をフランス革命に導入したとき，ロシア革命の図式から強い影響を受けたためである。ロシア革命の前史には，一連の工場労働者の運動があった。それを直線的に，フランス革命のレヴィヨン事件に結びつけたのである。しかし，第一次大戦前の社会主義者ジャン・ジョレスは，この事件を，事実に忠実に解釈して，工場労働者の運動ではないといっている。[28]

マチエの解釈は，そのまま戦前の日本に持ち込まれ，フランス革命が一工場内における労働者の暴動からはじまったというような理論的解釈が普及した。[29] こうした潮流をふまえて，注の説明に見られる解釈がつけ加えられたのである。

XIII バスチーユ占領の原因が明確にされていない

なぜ7月14日の時点でバスチーユ襲撃がおこったかについての説明は，マチエ以前では，あいまいなままにされていた。せいぜいところ，武力で国民議会を解散させようとしたことがとりあげられる程度であった。マチエのすぐれたところは，その解釈に，政治的原因だけではなくて，経済的原因を盛りこんだところである。そうでなければ，なぜ6月におこらなくて，7月におこったのか，しかも7月1日ではなくて，7月14日におこったのかという説明がつかない。

ただし，マチエの説明は，おしいことに，よい着想をもって書かれたにもかかわらず，それが突飛な形で，前後の脈絡なしに投げだされている。

---

28 ジョレス『フランス大革命史』村松正俊訳 平凡社 昭和21年，I，188頁。

29 たとえば，『服部之総著作集』I「維新史の方法」理論社 昭和30年，87頁において，「1789年のフランス革命は一工場内の暴動に始まった」という，ポクロフスキーの文章が引用され，ブルジョア革命の理論の基本に据えられている。

そのため，読者はなんのことか分らないままに，読みすごす可能性がある。

7日14日の直接的原因は，7月11日におこなわれた政権交代であった。その結果，経済政策として，何がおこなわれるはずであるかが，すでに予期されていたのである。マチエはそれのごく一部を暗示しているが，彼の叙述では，すべてを納得いくように説明したものにはなっていない。

「ルイ16世は事態を急迫させた。7月11日極秘裡にネッケルを罷免し，有名な反動家ブルトウイユ男爵をもって内閣をかわらせた。その翌日，いまにも（銀行）破産が宣告されようとしている，という噂がとんだ。ただちに取引所員は集合し，ネッケル罷免にたいする抗議のしるしとして取引所閉鎖を決定した。兵士を獲得するために金銭がまかれた。エチエーヌ・ドレツセール，ブレヴォトー，コワンドル，ボスカリのような銀行家は行員をひきいて，結成中のブルジョア軍に参加した。ネッケルとオルレアン公の胸像がパリ市中をかつぎ廻された」[30]。

ルイ16世が，ネッケルを罷免してブルトゥイユ男爵に内閣を変わらせたという表現では，全面的に事件の本質を物語ることはできない。ルイ16世が自分の思うままに首をすげかえたと解釈するのでは，王のもとにネッケルがいてもブルトゥイユ男爵がいても，ともに王権であるかのように思われる。そうではなくて，ブルトゥイユ男爵こそが本来の宮廷貴族で，本来の王権を象徴する貴族であった。反動家という表現を使っているが，もっとも保守的な宮廷貴族で，この本の注には外交官という表現を使っているが，駐オーストリア大使をつとめたことがあった。当時大使になるのは，貴族の中でも飛びきり名門でなければならなかった。しかも王妃の出身地であるオーストリアの大使であるから，これは第一級の官職であった。彼は，宮廷貴族の中でもとくに行動力のあった人物で，当時，宮廷貴族の救世主のように思われていた。

ところで，そのつぎの文章に，「（銀行）破産が宣告されようとしている，という噂がとんだ」と書かれている。なぜ，ブルトゥイユ男爵が内閣

30 マチエ前掲書 上，99～100頁。

をつくると銀行破産が宣告されるのか，そして，いったい銀行破産とは何か，内閣が銀行の破産を宣言するとの意味なのかどうか，ここが読者にはわからないところである。

ただ，いづれにしても，ドレッセール以下の銀行家達は，ネッケルの罷免，ブルトゥイユ内閣の組閣という事態について危険を感じ，抗議を申し込み，ついには自分たちの軍隊を勝手に結成し，新内閣にたいする抵抗の姿勢を示したことは理解できる。

その抵抗の象徴に，ネッケルと，オルレアン公爵がかつぎあげられたのであるから，ネッケルはバスチーユ占領の側であったと解釈でさる。そのネッケルが，7月11日以前財務総監の地位にあった。そうすると，その時点の王権とはいったいなんと解釈できるのか，これが問題である。

この短い文章だけでも，いろいろ複雑に絡み合っている事柄を，マチエがコマ切れにして，それを前後のつながりなしに文章の中に投げ込んだために，なにがなんだか分らなくしてしまったことを感じる。マチエの文章には，あちらこちらでこのような特徴が見られるが，とくにここはひどい。ただ，こうしたことを，いままでのフランス革命史家は取り上げず，純然たる政治的説明に終っていた。それにくらべると，マチエのフランス革命史がよりすぐれているとはいえる。

正確にいうと，ネッケルは，ブルジョアジーを代表して，一時的に王権の中にくいこんだ当時の改革派であった。財政赤字が極端になって，ルイ16世も，いやいやながらネッケルを迎え入れなければならなかった。しかしそれにもかかわらず，財政状態は好転しなかった。

このとき，宮廷貴族の主流は一つの計画をもっていた。それは，借款を実施するとともに，紙幣を印刷し，それで国家の債務を支払って，財政困難を切りぬける方法であった。当時の貨幣は金属貨幣で，とくに銀貨が中心になって流通していた。そうした時代に，国家が債務を銀貨で返済せず

に，1枚の紙切れで返済するという。しかも，それを発行した国家には金貨，銀貨の準備がない。当然，その紙幣の価値は下落する。そのため，紙幣で支払われた者は，破産の危機に直面するだろう。

当時，多くの銀行家，大商人，大工業家が国家にたいしてさまざまな形で金を貸し，商品を納めていた。それを強制的に紙幣で返済するというのであるから，銀行家や大商人，大工業家すなわちブルジョアジーの上層が破産の脅威に直面した。

また，強制借款が実施されると，上層ブルジョアに最大の割当てがくる。宮廷貴族は，今までのしきたりどおり，この負担を逃れるだろう。ブルジョアジーがこの借款に応じて，政府に金を払い込んでも，このような政府では，返済してくれる見込みが立たず，実質的には「金をまきあげられる」という表現が適切になってくる。これが，銀行破産が宣告されようとしているという噂の根源である。

つまり，銀行の破産を国家が宣言するのではなくて，銀行が破産するような政策を国家が打ちだそうとしているとの意味である。ネッケルは，この方針を実行するような人物ではなかった。なぜなら，彼も銀行家の一人であったから。

そこでネッケルを罷免しなければ，この政策が実行できない。そのとき，ネッケル罷免，ブルトゥイユ男爵の就任という政権交代がおこった。つまりは，譲歩の政策に終止符がうたれ，本性をむきだしにした権力，宮廷貴族の本流の権力が回復した。銀行家や大商人のような上層のブルジョアは，破産させられるか，それとも反乱に立ち上るかという選択をつきつけられた。そのため，彼らは命がけの反乱へと進み，ブルジョアジーの軍隊をかき集めた。したがって，ネッケルがその反抗運動の象徴になった。[31]

31 ここに至るくわしい事情は，拙著『フランス革命経済史研究』255～256頁，『フランス革命の経済構造』240～255頁，『フランス革命史入門』105～114頁に書かれている。

バスチーユ襲撃は，きわめて単純化したいい方をすれば，宮廷貴族の本流と上層ブルジョアの軍事的対決あり，そのぎりぎりの対決点は財政政策をめぐるものであった。前者は正規の軍隊をにぎっているが，後者は本来武力をもたない。そこで，市民を武装させたり，正規軍の兵士や下士官を自分の側に引き入れたりして，にわか作りの革命軍を編成した。この対決が，バスチーユ占領へとつながっていく。マチニの文章には，このあたりの事情が，前後の脈絡なしに，こま切れにされてつっこまれている。これでは，フランス革命のもっとも重要な事件の正確な説明がなされていないことになる。

また，王権の側の先発隊として，ドイツ人連隊を率いてパリ市民を襲撃した「ランベスク親王」のことが書いてある。事実は正しいが「親王」という翻訳は誤解を与える。彼は国王の一族ではない。王妃の血縁で，ロレーヌ公爵ともいわれるが，国王の血族ではなくて，最高級の貴族として太公であった。この翻訳で親王にすると，バスチーユ占領の敵対者が国王の一族にまとめられる。これでは，王権が宮廷貴族の階級的な権力であるという観点が見うしなわれる原因になる。

XIV　7月14日の敗者は誰か

ほとんどのフランス革命史が，国王対国民議会の対立でバスチーユ占領を説明し，議会の側についた武装勢力を人民とか群衆と表現する。その延長として，敗北した国王は譲歩を決意し，国民議会の権利が認められ，これで騒乱はおさまったという説明になる。これでは，この時点で深刻な敗北をこうむった階級のことが分らなくなる。国王はただ譲歩しただけであるから，国王一家についていえば，まだ王権は存在しているので決定的な敗北とはいえない。

そのため，7月14日の時点では，まだ決定的な敗者が存在しないのでは

ないかと思わせるような書き方が一般的になっている。これが，フランス絶対主義やフランス革命に対する基本的な誤解を招いた原因である。

マチエは，その点について，少しだけふれている。

「王の臆病さを怒ったアルトワ伯や親王たち，ブルトウイユや抵抗派の首領たちは外国へ逃亡し，こんなふうにして亡命のキッカケをつくったのである」。[32]

このとき亡命した者が，7月14日の敗者であり，絶対主義時代の王権の支柱であった。それは，宮廷貴族の本流を代表する最高級の宮廷貴族であった。ブローイ公爵（元帥），ブザンヴァル男爵，ブルトゥイユ男爵，ランベスク太公（ロレーヌ公爵，ドイツ人連隊長），コンデ太公，ポリニャック公爵など，当時有名な貴族の一団であった。[33]

ただ，マチエの表現では，物事の本質がゆがめられる恐れがある。アルトワ伯は王の弟であり，これに親王たちを加えると，国王の一族と理解され，国王の家族の中での分裂と受けとられる。しかし，この中の「親王」とは，太公のことで，最高級の宮廷貴族を指すべきものである。つぎに「抵抗派の首領」で何を言わんとしているのか，明らかでない。抵抗というと，弱者の立場を思い浮べる。もちろん，7月14日の時点で弱者の立場に立ったのではあるが，それまでは宮廷の中で最大の特階をもっていた者だということを忘れさせるような表現である。ここで，なぜ，マチエは，宮廷貴族だといわないのだろうか。そのうえ，ブルトゥイユだけに男爵をつけず，他の貴族については，同じ頁ですべて爵位をつけている。すると，前に書いてあったことを忘れた読者は，ブルトゥイユが貴族ですらなかったのかと思うかもしれない。

こうした書き方は偶然だろうか，それとも意図的なものだろうか。私は，やや意図的ではないかと思う。なぜなら，ここで敗北し，亡命したものが最有力者の宮廷貴族であったならば，マチエのたてた「貴族革命説」

32 マチエ前掲書 上，103頁。
33 拙著『フランス革命史入門』109～110頁。

の根拠がくずれるからだ。そこで，わざと色を薄めて，抵抗派とかいって本質論を避けたものと思われる。

また，亡命したものが「王の臆病さを怒った」というと，国王と亡命者の意見が対立し，亡命者は王権に対立して去ったかのような印象を受ける。マチエの立論では，このように書かざるをえない。彼は，国王対貴族という図式を背後にもっているからだ。しかし，王が臆病であろうとなかろうと，宮廷貴族の中心人物は逃げなければならなかった。ランベスク太公，ブローイ公爵は殺されそうになったところを命からがら逃げ出し，ポリニヤック公爵夫妻の首には懸償金がかけられた。ブザンヴァル男爵は捕えられて処刑された。彼らは革命の側からの復仇の対象となっていた。

彼らこそが，7月14日における敗者であった。その前日までは，彼らがフランス絶対主義の支配者であり，王権の支柱を構成していた。国王は彼らの代表者であった。7月14日の本質は，彼ら最強の宮廷貴族の権力を破壊し，国王を彼らから切り離したところにあった。